「103 歳　戦後を語る」

私たち日本人は、８月 15 日を第二次世界大戦（太平洋戦争・大東亜戦争）の終戦記念日や終戦の日とし，この日に政府主催の「全国戦没者追悼式」や平和集会が開催されます。1945 年（昭和 20 年）８月 15 日は、天皇陛下による玉音放送により、日本の降伏が国民に公表された記憶に残る日です。しかし、世界的な終戦の日は、1945 年（昭和 20 年）９月２日です。日本政府が、ポツダム宣言の履行等を定めた降伏文書（休戦協定）に調印した日です。日本を領土の点から考えると、日本が大日本帝国と称された期間の最盛時には、現在の領土に加え、南樺太・朝鮮半島・台湾などを領有していました。現在の日本列島を『内地』それ以外を『外地』といい、『外地』にたくさんの日本人が移住し、生活をしていました。

このお話は、今から 75 年前の昭和 20 年、二宮モモエさんが 28 歳の時のことです。モモエさんは、その当時、現在の北朝鮮で家族４人『外地での生活』を送っていました。長女の静子さんは３歳、次女の文子さんは１歳でした。

八本松町原在住の二宮モモエさんは、大正５年 12 月 28 日生まれの 103 歳。令和２年６月現在、ご近所に住むふたりの子ども家族に支えられ、介護保険のデイサービスを利用されながら、ひとり暮らしを満喫しておられるスーパーレディです。

このお話は、モモエさんが、戦前・戦中を振返り、平成 27 年４月、白寿祝でお祝いに参列された方へのお礼のお手紙の一部です。（抜粋）

2020 年７月 20 日　原地域センター

「戦争と私の人生」

戦後の私の人生を述べさせて頂きます。少しお時間を下さいませ。

昭和20年８月13日、戦争のため避難。可愛い文子は満一歳でした。離乳を始めていましたが、食べ物がなく昭和20年８月８日に亡くなっていました。その時、朝鮮人のお店に行ってソーメン箱を貰い、身体を二つに折ってその中に入れ、山に穴を掘って土をかけてお別れをしたのです。

毎晩、仏様に手を合せ、「文子ちゃん、連れて帰って上げられなくてごめんね」と語りかけますと、その時、私の頭に浮かんで来るのは、満一歳の時の可愛い姿です。

生まれて八ヶ月頃から、毎朝、お父さんのサーベルと、帽子や靴を玄関に揃えて、「あーあっ」と言って頭を下げておりました。あの時の可愛い仕種と哀れな姿、お腹がすいて言葉では言えないので、私のくちびるに吸いついて泣いておりました。戦争さえなったらなんでも食べさせてあげて、だっこして甘やかし、しっかり抱きしめてあげられたのに、思い出しては幾度も涙を流すのです。

避難している時、食べるものがなく、北朝鮮の寒い所で発疹チフスが流行り、大人も子供さんも大勢の人が亡くなられました。遺体をムシロにくるんで車に乗せ、山に大きな池のような穴を掘って、遺体を重ねて土をかけてお別れをしておられました。

国が戦争をしなったら、こんな悲惨な思いをしなくて幸せに過ごせたのにと、国を何度も恨みました。

寒い冬を二度迎えようとしている時、アメリカの舟が迎えに来てくれました。最後の引き揚げ者は千人と言っておられました。千人の中で、小さな子供を連れていた人は、私一人でした。９月20日頃だったと思います。アメリカの貨物船に乗り、機雷があったらいけないといって、山際を通って一ヶ月もかかって、10月20日に大竹に上陸したのです。

その時、持っていた貯金は全部没収され、帰った時には一円もありませんでした。明日からどうしようと言う状態でした。近所に優しい方がおられまして、「明日からうちの田んぼ五反を作りなさい」と言って頂き、助けて頂きました、お米が出来てからは、家族がお腹一杯食べる事が出来たのです。馴れない仕事で大変でしたが、回りの方がお優しい方でしたので、一つ一つ教えて頂きました。今日まで元気で過ごせたのは、皆さんのお陰と感謝しております。

二宮　モモエ